

# 教科書新聞教材活用のための必要事項の一考察

## Consideration of the Necessary Information for Utilizing Textbook Newspaper Teaching Materials

中西一彦\*  
Kazuhiko NAKANISHI

### 【抄録】

新学習指導要領には「新聞」という言葉が多く盛り込まれている。新聞活用には「新聞に親しむ」「新聞を読む」「新聞で考える」という三段階がある。新しく教科書教材として取り上げられた新聞活用のための教材に照らし合わせて、この三段階の整合性を考える。今回は1社の4年生、5年生、6年生の教科書新聞教材を対象に、実践をより効果的に行うための必要事項を挙げることにした。事前の準備を周到に行っておくこと、特に子どもたちの実態、現状をしっかりと把握し用意することをもとに考察を行った。

### Abstract

The word “newspaper” can be frequently seen in new educational guidelines. There are three steps for utilizing newspaper as teaching materials. The first step is to be familiar with newspaper. The second step is to read the newspaper. The third step is to think about what is read. Considering the three steps of the newspaper’s practical use as teaching materials was taken into consideration. Following the necessary matters in using newspapers effectively, specifically by using these as teaching materials for 4<sup>th</sup>, 5<sup>th</sup> and 6<sup>th</sup> graders, was decided. Preparing well and understanding real situation and features of children were also considered.

## 1. はじめに

### 1.1 NIE 運動の効果

日本新聞協会がNIE（教育に新聞を）運動を開始したのが、1985年である。以来、25年を経て、小学校で2011年度、中学校では2012年度から実施の新学習指導要領には「新聞」という言葉が多く入った。NIEとは、Newspaper in Educationの略である。新聞を生きた学習材として教育に

---

\* 関西国際大学教育学部

活用する運動を意味し、教育界と新聞界とが協力して行う活動である。NIE 運動以前から行われている、新聞を教科の補助教材として活用するという実践とは異なる。「新聞を丸ごと使用する」「複数の新聞を使用する」という点が、これまでの切り抜き記事を用いて行うことが主流であった実践形態と違う。NIE を「新聞を授業に使うことである」と理解すると、単なる補助教材として新聞を扱うことになる。そうではなく、教育目標を明確にすることが NIE 運動には大事である。米国新聞協会が NIE の教育目標として掲げているのは次の 3 点である。<sup>1)</sup>

- (1) 新聞を批判的に深く読む能力の向上とそれを継続しようとする意志を啓発する。
- (2) 社会問題に対する関心を高め青少年に民主主義社会の一員として自覚を持たせる。
- (3) 民主主義社会における報道の自由と新聞が果たしている役割について理解を深める。

では NIE の教育的効果はどのようなものなのか。新聞を授業に活用することで子どもにどのような能力が身につくのか。これについては妹尾彰が、次のように紹介している。<sup>2)</sup>

日本新聞教育文化財団が2005年度に指定した NIE 実践校の児童、生徒を対象に実施した「NIE 効果測定調査」の中から、特に「NIE で好きになったこと」を分析すると、①読解力の向上（文章を読む、漢字を覚える、文章を書く）②コミュニケーション能力の向上（意見を聞くこと、考えを発表する）③調べ学習に有効（調べ知る）などに大きく役立っていることが読み取れます。

さらに NIE セミナーや研修会での実践報告を総合して、教師が新聞の活用をどうみているかについての妹尾のまとめは次の通りである。<sup>3)</sup>

#### ■学力面での効果

- (1) 社会への関心や国際理解が深まる
- (2) 文章の読み書き能力がつく
- (3) 情報を選択活用する能力がつく
- (4) 豊かな思考力や独創性が育成できる

#### ■学力以外の面での効果

- (1) 幅広い人間教育ができる
- (2) 教室と家庭を結びつける
- (3) 教室が生き生きする

## 1.2 新聞活用の三段階

新聞活用の実践モデルとして、妹尾は「新聞活用の三段階」<sup>4)</sup>を示している。これは新聞活用上の基本的なステップを示したもので、まず新聞に親しんだ上で、新聞を読み、考える段階へ発展する活用の手順をモデル化したものである。特に第1ステップは、小・中学生にとってきわめて重要で、この段階を省略して一足跳びに第2、第3ステップを実践すれば〈新聞に親しみ、楽しく読んで考える〉習慣を身につけることはできない、と言う。

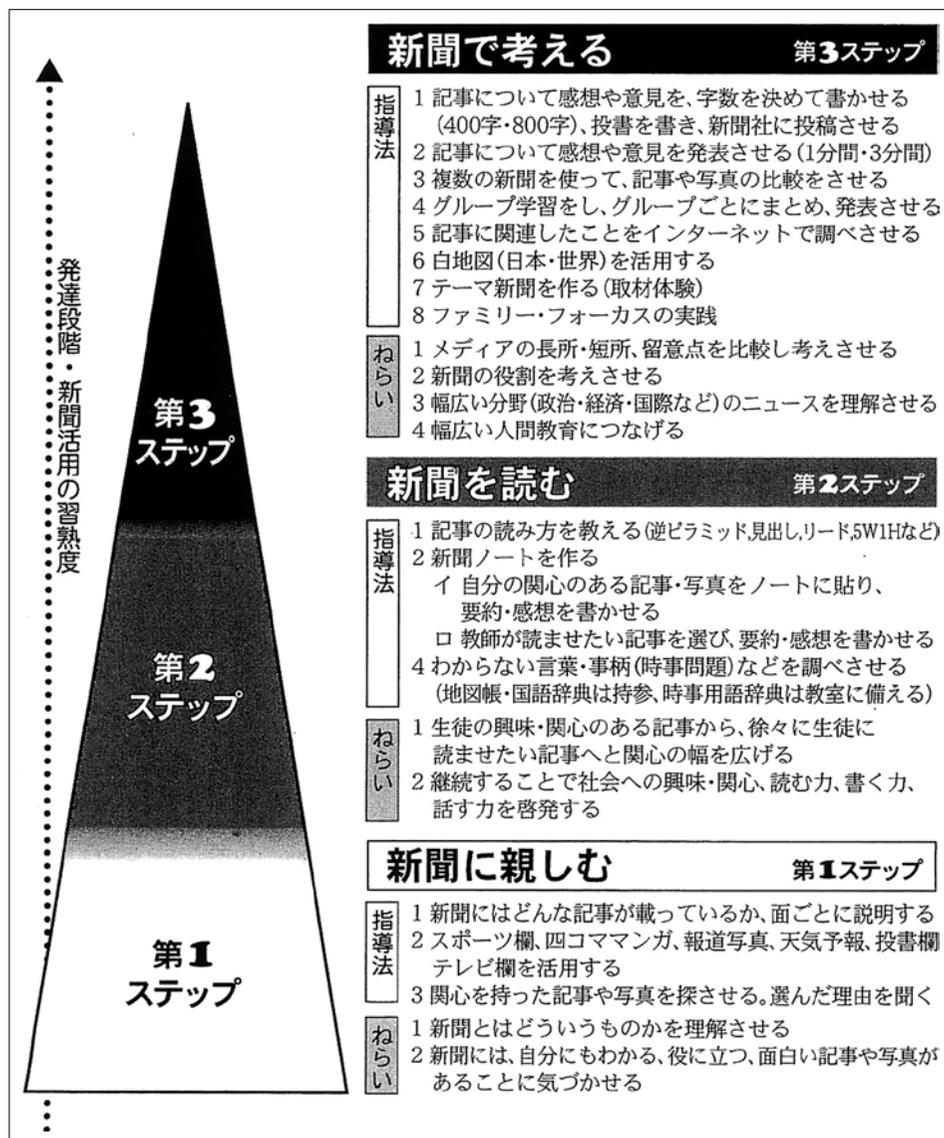


図1 〈新聞活用の三段階〉

## 2. 新聞活用の三段階からみた教科書教材

### 2.1 新聞活用の三段階と教科書教材の対応

妹尾は「新聞に親しむ→新聞を読む→新聞で考える」という新聞活用の三段階を示し、具体的な指導法とねらいを挙げている。これをそのまま小学校における新聞活用にあてはめるのではなく、新しく教科書教材として取り上げられた新聞活用のための教材に照らし合わせて、その段階の整合性を考えてみたい。

図2 〈新聞活用の三段階と教科書教材の対応〉

新聞活用の三段階	新しい国語（東京書籍）	対 応
新聞に <u>親しむ</u>	みんなで新聞を作ろう （四下）	一般紙とは異なる，学級新聞という身近な話題，身近な形式で新聞を作ることで，新聞に <u>親しませる</u> ことができる。
新聞を <u>読む</u>	新聞記事を読み比べよう （五上）	書き手の意図を考え，さらに2つの記事を読み比べることで，新聞の特徴（見出し，リード，本文といった記事の書き方）や編集の仕方，写真の役割を確かめることができる。この読み取りを通して，一般紙の記事を <u>読む目</u> が養われる。
新聞で <u>考える</u>	新聞の投書を読み比べよう （六上）	新聞の投書を4つ読み比べ，自分が納得するものを選ぶという作業を通して，新聞で自らの考えを明らかにする <u>ことが可能である</u> ことに気づく。

上の対応表からもわかるように，妹尾の新聞活用の三段階の「親しむ，読む，考える」という言葉を踏まえての学年別教材配列ととらえることができる。

この「親しむ，読む，考える」という三段階は，新聞以外の他の分野，領域においても，あてはまるものであるということに気づく。例えば，「古典に親しむ」「古典を読む」「古典で考える」という段階があってもよいであろう。また「絵本に親しむ」「絵本を読む」「絵本で考える」とすれば，やはり発達段階に即した学習内容を想起することができよう。

つまり，この「親しむ，読む，考える」という三つの段階は，妹尾の言うように，踏むべきステップであり，文字通りの実践モデルというわけである。その中でもとりわけ，第1ステップは重要である，ということである。まずは「新聞に親しむ」段階から新しい教科書教材をみていきたい。

## 2.2 「みんなで新聞を作ろう」（四下）<sup>5)</sup> の実践をより効果的に行うために

新聞を見たことがありますか。

新聞には，いろいろな出来事を伝える記事がのっています。

この2文に対する準備として必要なことは，次の2つである。

- 1 この学習までに「新聞」（小学生新聞だけでなく，一般紙も）を教室に掲示していることが必要である。
- 2 この学習の最初の時間には，一人一部ずつの新聞が，実際に子どもたちの手元に存在することが必要である。

具体物をあらかじめ目にしておくことが大事である。最近では，家庭における新聞購読率は低下している。家に新聞がないという家庭は多い。ニュースはインターネットで十分と考えている家庭も増えている。「新聞を見たことがありますか。」の一文において，指導者は「見たことがあるよね」という思いを抱き，子どもたちの多くは「見たことがない」という反応を示す。この齟齬は大きい。気をつけなければ疎外感を味わい，モチベーションが下がる恐れがある。まずは新

聞掲示で違和感をなくしておくことが肝要である。

そこで、次の「いろいろな出来事を伝える記事がのっています。」に続くわけである。たとえ掲示はしていても、記事の内容にまで子どもたちの目が及ぶとは限らない。やはり実際に手にとって確かめることが必須である。新聞の紙面をめくるときに驚きと発見がある状況を作りたい。

わたしたちも身の回りの出来事取材し、学級新聞を作りましょう。次のページの新聞の例を見てみましょう。新聞には、どんなくふうがあるでしょう。

□3 学級通信新聞をあらかじめ発行しておくことが必要である。

新聞の実物を見、紙面を繰るという体験をもったからといって、学級新聞作成には、飛躍が感じられる。これもあらかじめ範になるものが必要である。できれば4年生になって発行する担任の学級通信の何回かに一回は、学級通信新聞として発行して欲しい。

そのくふうとか配慮があれば、「次のページの新聞の例」も生きたものとなってくる。つまり、例に挙げられている「なかま」と担任の先生の新聞とを比較して把握することが可能になるからである。

新聞の名前、作った人の名前、  
日付が書いてあるよ。

おもしろい見出しだな。「何だろう。」と  
思って、読みたくなるね。

「いつ」「どこで」「だれが」「何を」  
「どうした」のかが、よく分かるね。

記事の置き方や大きさで  
目立ち方がちがうね。

写真があると、どんな様子が  
よく分かるね。

グラフがあると、分かり  
やすいね。

いろいろな話題の記事  
がのっているね。

「なかま」の周りにちりばめられている7つの観点。この7つの観点が学級通信新聞に自然と組み込まれたなら、「なかま」を見たときに、子どもたちから「これは学級通信新聞と同じだ」といった声上がるであろう。この気づきが求められる。担任として用意周到な仕掛けといつてよい。

- ①グループで新聞作りの計画を立てよう  
どんな新聞にするか、話し合ひましょう。
- ②わり付けを考え、記事を分たんしよう  
それぞれが集めてきた題材を持ちよって、グループで話し合ひましょう。

□4 話し合ひを成立させるためのトレーニングが必要である。

これについては、この新聞単元「取材したことをもとに学級新聞を作ろう」の直前に「みんな

で話し合っ」という教材が配されている。話し合いの進め方と司会の役わりについてを実際の話し合いを通して学ぶわけである。

この直前の話し合いの学習がきちんと行われていなければ、新聞作りの計画をグループで話し合っ進めることは難くなる。学習の繋がりが求められるところである。言い換えれば、学習の成果が示されるところである。

③記事を書こう

インタビューしたり、資料を集めたりして、くわしく取材し、記事の下書きを書きましよう。

- ・出来事のだいじなことを落とさないように書く。
- ・記事に合わせて、読む人の興味をひくような見出しを考える。
- ・写真や図などの資料を加えて、分かりやすくしてもよい。

□5 インタビュー形式の取材や資料にあたることに慣れておくことが必要である。

インタビューについては、「インタビューをしよう」(三下付録)、インタビュー時のメモの取り方については、「聞くときのメモをくふうする」(四上)で既習事項である。十分でなければ、復習として学習指導計画に組み込まなければならない。

□6 出来事を書いて伝えるための「5 W 1 H」を確かめることが必要である。

「わたしが選んだ今月のニュース」(四上)において、「いつ(When)」「どこで(Where)」「だれが(Who)」「何を(What)」を書くことがだいじであると示されている。その4つに「なぜ(Why)」「どのように(How)」の2つを付け加える。これまでも5 W 1 Hという言葉は用いなくとも、日記指導等で繰り返し指導がなされているはずである。この新聞作成を機に改めて5 W 1 Hという言葉とともに確かめたい。実際の新聞記事を取り上げての確認も可能であるし、学級通信新聞からの取り上げでもよいであろう。

□7 題名読みで見出しのくふうに気づかせることが必要である。

教科書の目次に着目させる。「水平線」「ごんぎつね」「くらしの中の和と洋」「みんなで新聞を作ろう」「世界一美しいぼくの村」「報告します、みんなの生活」「『ゆめのロボット』を作る」「木竜うるし」と題名が並んでいる。

- ・名詞だけの題の場合はどのような印象を受けるか。
- ・「和と洋」といったように2つを並べた場合に頭に浮かぶことはどんなことか。
- ・「作ろう」と「作る」では、どのような違いを感じるか。
- ・「報告します、みんなの生活」と「みんなの生活、報告します」ではどちらの方が興味をひくか。
- ・「世界一」「美しい」「ぼくの」と飾りのことばを続けることで、イメージの重なりはどのように変化するか。また飾りのことばの順序を変えるとどうなるか。

こういった問いに答えることで、題名の持つ意味をとらえさせたい。このような学習は、日頃の指導の導入段階でなされている。この題名読みから派生して見出しのくふうへと向かわせたい。

- 8 写真や図などの資料の扱いに慣れさせるために、掲示物に写真や図を加えておくことが必要である。

子どもたちの新聞作成時においては、文章よりも写真や図に依存しすぎる傾向がある。これはわり付け段階で点検しておくことが大事である。しかし、写真や図を効果的に用いることも指導しておきたい。今回は「加えて、分かりやすくしてもよい」という扱いであるので、大きく取り上げることはしない。そこで、教室での掲示物に必ず写真や図を加えておきたい。壁新聞形式の掲示物で写真や図が加えられておれば、なおさらよい。

④新聞を完成させよう

下書きをグループで読み、よりよい記事になるように意見を伝え合いましょう。

- 9 下書きから清書への推敲は観点を決めておくことが必要である。

「よりよい記事に」するためにグループで意見交換を行う。その際に気をつけなければならないのは、「よりよい」の観点を決めておくことである。うまい文章でなくてよい。具体的には、次の3つを観点としたい。

- ・わり付けに応じた字数になっている。
- ・5W1Hを踏まえている。
- ・表記、特に数や名前を正しく書いている。

⑤新聞を読み合おう

友達のグループの新聞を読んで、どんなところがおもしろかったか、どんなところがくふうされていると思ったか、伝え合いましょう。

また、自分たちの作った新聞について、分かりやすい記事が書けていたか、読む人が興味を持って読めるようにくふうできたか、ふり返りましょう。

今回は各自が作成した記事を台紙にはった新聞である。壁等に掲示される。「伝え合う」には、口々に感想を出し合うという方法がある。ただこれではその場で消えてしまい、残らない。感想用紙に記入して、それを印刷するという方法もある。これはかなりの量になる。感想用紙をそのまま掲示することも考えられる。これはスペースの確保がいる。そこで、大きめの付箋の利用を考えたい。「どんなところがおもしろかったか」「どんなところがくふうされていると思ったか」を付箋の色を変えて、掲示された新聞の周囲に貼り付ける。質問に対しては、返答を付箋に書いて貼るということも考えられる。これで「伝え合い」は成り立つ。

次に、いったん貼られた付箋を外し、それを共通する内容ごとに分け、別の台紙に貼っていけば、傾向分析が可能になる。これは「ふり返り」につながる。

### 2.3 「みんなで新聞を作ろう」(四下)の実践の成果を定着させるために

これで「みんなで新聞を作ろう」の実践は終わる。しかし、これで終わってしまえば、新聞作成のノウハウは定着しない。継続することが大切である。だが、グループでの作成は手間がかかり日常化することに躊躇する。そこで「日直新聞」の作成に取り組みせたい。日直は、原則とし

ては、毎日2人で担当する。その日一日の教室の環境整備や管理を主な仕事とする。終わりの会の司会なども仕事の一つである。鍵の管理を行う学校もあれば、その日だけは遊び時間も運動場へは出ず、教室の留守番を行うこともある。いつもとは違った視点で、教室風景そしてクラスを眺めることになる。そこで「日直新聞」作成である。クラスのその日一日を題材として取材するのである。それを2人で協力して新聞にする。できればB4一枚の大きさが適当であろう。ただ、慣れるまでは、抵抗感を和らげる意味でハガキ大での作成でもよい。毎日発行し続けることが大事である。個人としての担当は一月に一回程度になる。しかし、クラスとしては毎日発行される。継続することでくふうが生まれ、他の者への影響、刺激もある。学級日誌との兼ね合いもあろう。たんに事実の記録と簡単な感想を記す「学級日誌」とは異なる。自らの視点で話題を取り上げ、5W1Hののっとり記事化するのが「日直新聞」である。写真や絵、図などを加えることも可能である。

## 2.4 「新聞記事を読み比べよう」(五上)<sup>6)</sup> の実践をより効果的に行うために 第2ステップ「新聞を読む」へと進む。

わたしたちは毎日の生活の中で、新聞、テレビ、インターネットなど、さまざまなメディアと接しています。中でも新聞は、みなさんにとって身近なものの一つといえるでしょう。実際に新聞を読んだり学級新聞を作ったりした経験のある人も、多いにちがいません。

□10 新聞掲示や日直新聞(学級新聞)を継続することが必要である。

新聞、テレビ、インターネットなどの、いわゆるメディアの比較をさせたいところであるが、ここでは新聞記事の読み比べが主眼である。参考として、新聞、テレビ、インターネットの比較一覧表を準備して読ませる程度にとどめたい。問題は次にある。「中でも新聞は、みなさんにとって身近なものの一つといえるでしょう」という状況であってほしいのは確かである。しかし、子どもたちの実態とかなりかけ離れているのも事実である。その段差を埋めるのが、「実際に新聞を読んだり学級新聞を作ったりした経験」である。ここで4年生での実践が生きてくる。さらに言えば、その実践の後に継続された「日直新聞」の果たす役割が大きくなっていくのである。「日直新聞」は、この5年生の新聞教材への興味をつなぎ止める錨の役割である。

ここでは新聞を取り上げて、編集の仕方や記事の書き方、記事といっしょにけいさいされた写真の役割について考えます。あわせて、新聞の読み方についても考えてみましょう。

□11 複数紙の新聞を掲示し、読み比べできる環境を作ることが必要である。

新聞に対する心理的な距離により、新聞記事読み比べへの取り組みは大きく変わってくる。心理的な距離は、新聞にどの程度触れているかによって異なる。日頃から新聞に接していれば、違和感なく能動的に取り組もうとする。ところが、新聞を手にすることも目にするものもないとなれば、活字の埋まった紙を読もうとはしない。実際には後者がほとんどである。やはり、新聞に触れることを日常化するくふうが求められる。いきなり記事の読み比べでは、尻込みをするかも

しれない。新聞掲示を継続する中で、時には同じ話題の記事を複数紙分貼りだしてみる。特別な出来事が起こったときでなくてよい。歳時記的に毎年決まった話題の記事がある。例えば、入学式、お花見、ゴールデンウィークなどである。自然と読み比べる環境を作っておきたい。

新聞の特徴と、編集の仕方や記事の書き方を確かめよう

新聞記事は、ふつう、見出し、リード、本文の三つから構成されます。

新聞記事の本文は、特に、事件や事故などの出来事について伝える報道記事の場合、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「なぜ」「どのように」の六つの要素をおさえて書かれます。ですから、読み手は出来事を、正確にくわしく知ることができます。

□12 新聞タイムを定期的に設けることが必要である。

新聞を手にした時、その分量の多さに圧倒される。新聞朝刊の文字量は新書一冊分と言われる。紙面を見ても、茫洋としてどこに何が書いてあるのか全く分からない。その中で「見出し」は、いちばんの手引きである。「見出し読み」だけで、その日の新聞報道を大まかに知る。さらにリード、本文と進めば記事の概要をつかむことができる。特に、報道記事の本文は、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「なぜ」「どのように」という6つの要素、いわゆる5W1Hをおさえることで可能になる。ただ、このようなことは既習事項として復習程度で扱えるようにしておきたい。

新聞には、報道記事のほか、社説、コラム、解説、投書、短歌や俳句など、いろいろな種類の文章がけいさいされています。

新聞の紙面は、社会、経済、政治、産業、国際、教育、文化、スポーツなど、話題の分野別に構成されています。読者の興味や関心に応じて、どの紙面からでも、どの記事からでも読めるように編集されているのも、新聞の大きな特徴の一つといえるでしょう。

紙面の構成は、たんにどこに何があると指摘するだけではなかなかつかめない。ここは「習うより慣れよ」である。最初は紙面をめくる手もおぼつかない。何度か新聞を手にするうちに手つきもなめらかになる。そのうち、自分の興味や関心のある紙面にさっとたどり着くようになる。「習うより慣れよ」のためには定期的に新聞を手取るのが必須となる。読書タイムは各地で定着してきた感がある。その読書タイムの何回かに一回を新聞タイムとしたい。「どの紙面からでも、どの記事からでも読める」ようにするためにも、新聞タイムを定期的に設けることが必要である。

記事を選び、見出しーリードー本文の構成に従い、また、5W1Hの要素をおさえる。この新聞の特徴になじむための前提として、新聞タイム設置による紙面構成の把握は欠かせないものである。

写真の役割を確かめよう

記事には、写真がいっしょにけいさいされているものも多くあります。

写真は、読み手の興味をひくためだけにあるものではありません。記事の内容を理解するのに役立ったり、写真の内容によっては、記事以上に出来事の状況や伝えている役目を果たしたりもしています。

□13 写真だけの取り上げ指導を行うことが必要である。

新聞というと文章のみのイメージが強い。だが、実際には写真が効果的に配されている。新聞での写真の効果に着目するためにも、写真だけの取り上げ指導を行いたい。例えば、遠足のしおりや運動会、音楽会の案内で写真を入れたものと入れないものを作成してみる。写真の有無による印象の違いを話し合う。教科書に掲載されている写真だけを見て、キャプションをつけてみる。また新聞掲示の際に、新聞に掲載されている写真のみを掲示しておくことも、写真の役目を考えるきっかけになる。

二つの記事を読み解いてみよう

新聞を持ち寄って写真といっしょにけいさいされている記事の一つを選び、記事の内容と写真に合った見出しを考えて書きましょう。

□14 てびきで用いる新聞記事は一人一つ担当できるだけの数を準備しておくことが必要である。

教科書に掲載されている新聞記事で共通点をまずおさえる。次に相違点として、見出しやリード、本文の比較を行う。さらに写真の比較を行う。こうして読み比べの手順を学ぶ。この手順で再度別の新聞記事を用いての読み比べを行う。応用の段階であるので、自由な気持ちで取り組めるように、優劣を意識させない配慮をしたい。そこで一人ずつ担当する新聞記事が異なるように準備することが必要である。

この新聞記事の読み比べの学習では、記事の良い悪いを探るのが目的ではなく、書き手の意図を考えながら新聞を読むことが目的である。つまり、自らが書き手になった場合に、その手順やくふうをそのまま生かすことが大事である。そのためには、この教材のあとに配されている「立場を明確にして書こう」において、成果を試すことが可能である。

## 2.5 「新聞の投書を読み比べよう」(六上)<sup>7)</sup> の実践をより効果的に行うために

第3ステップ「新聞で考える」に進む。

多くの新聞には、読者からの投書をまとめたコーナーがあります。このようなコーナーにけいさいされている投書は、ある出来事やテーマ、身近な問題などについて、考えたり感じたりしたことを述べた意見文といえるでしょう。

□15 意見文の材料決定のために、話題提供となる投書を数多く用意しておくことが必要である。

ここでは新聞の投書を用いるものの、ねらいは意見文を書かせることである。まずは意見文の構成を把握することである。

四つの投書を読み比べよう

四つの投書は、どれも次のような構成で書かれています。確かめてみましょう。

一 話題の提示



二 書き手の意見や主張



三 第一の理由や根拠



四 第二の理由や根拠



五 予想される反対意見に対する反論



六 書き手の考え（まとめや最後の一言）

4つの投書を読み比べることで、意見文の「型」を知ることができる。内容の自由度を増すためには、形式の負担を軽くすることが有効である。形式模倣による内容創造である。この「型」の中で、読み手を説得するためのくふうが必要となる。

それぞれどのようなくふうをしているか考えて、次に挙げた中からもっともふさわしいと思うものを選びましょう。

- ・自分の経験を述べる
- ・見たり聞いたりしたことを述べる
- ・資料にもとづく具体的なデータを使う
- ・有名な人の言葉を引用する

投書の読み比べを通して、読み手を説得したり、読み手に共感を与えたりするくふうがどこにあるかを確認する。さらに「四つの投書の中から、自分が納得するものを選ぶ」というてびきを考えることで、自分に適したくふうを知ることができる。

次に、『わたしの意見』を書こうに取り組むことで、実際に意見文を書くことになる。この際に用意された実際の投書に対する自分の意見を書くことにする。

①取り上げる問題を決めて材料を集めよう

日ごろの生活の中で経験したことや感じたことをグループで話し合い、それぞれどんな問題を取り上げるかを決めましょう。

とあるが、実際には、どんな問題を取り上げるかが最も難しいのである。ここでは、意見文を書かせることが最優先事項である。取り上げる問題は選択できるようにしておくことである。投書を例に学習したのであるから、やはり材料も投書から選びたい。書かれたものに反応していくという方法は、気持ちの上で楽である。

④意見を伝え合おう

書き上げた意見文を、友達と交かんして読み合しましょう。

意見と理由が書かれているか、分かりやすい構成になっているかに気をつけて読みましょう。友達の文章が良くなるように助言したり、自分が書くときの参考にしたりしましょう。

推敲の観点を友達で行うことで、客観性を持たせることができる。思い込みの文章になっていないか、一方的な意見になっていないかを確認め合うことができる。

## 2.6 「新聞の投書を読み比べよう」(六上) の実践の成果を試すために

これで意見文の完成として終えてもよい。しかし、よりモチベーションを高め、成果を試すためには、実際に投書してみるということも考えられる。ある投書に対して、根拠を挙げて自分の意見を展開したのである。採用されるかどうかは別にして、投書してみることに意義がある。

投書は、一種の社会参加の方法だともいえます。したがって、責任ある態度で投書することが大切になってきます。

ここでいう「責任ある態度」というのは、まず相手の意見を正確に理解しているかどうかということである。さらに、自分の意見が誤解を招くような表現になっていないかを改めて点検してから投書するということである。もし投書が掲載されたならば、社会参加できたという大きな自信につながるであろう。

## 3. おわりに

### 3.1 教科書新聞教材を活用するための15の必要事項

- 1 この学習までに「新聞」(小学生新聞だけでなく、一般紙も)を教室に掲示していることが必要である。
- 2 この学習の最初の時間には、一人一部ずつの新聞が、実際に子どもたちの手元に存在することが必要である。
- 3 学級通信新聞をあらかじめ発行しておくことが必要である。
- 4 話し合いを成立させるためのトレーニングが必要である。
- 5 インタビュー形式の取材や資料にあたることに慣れておくことが必要である。
- 6 出来事を書いて伝えるための「5W1H」を確かめることが必要である。
- 7 題名読みで見出しのくふうに気づかせることが必要である。

- 8 写真や図などの資料の扱いに慣れさせるために、掲示物に写真や図を加えておくことが必要である。
- 9 下書きから清書への推敲は観点を決めておくことが必要である。
- 10 新聞掲示や日直新聞（学級新聞）を継続することが必要である。
- 11 複数紙の新聞を掲示し、読み比べできる環境を作ることが必要である。
- 12 新聞タイムを定期的に設けることが必要である。
- 13 写真だけの取り上げ指導を行うことが必要である。
- 14 てびきで用いる新聞記事は一人一つ担当できるだけの数を準備しておくことが必要である。
- 15 意見文の材料決定のために、話題提供となる投書を数多く用意しておくことが必要である。

当然のことながら入門期といえる第1ステップ4年生の「新聞に親しむ」段階での必要事項が多い。しかも、あとのステップでは、それらが螺旋状に繰り返し必要となっている。基礎基本は第1ステップにある。前述の妹尾の「特に第1ステップは、小・中学生にとってきわめて重要で、この段階を省略して一足跳びに第2、第3ステップを実践すれば〈新聞に親しみ、楽しく読んで考える〉習慣を身につけることはできない」という言葉に合致する。

### 3.2 今後の課題

今回は1社の4年生、5年生、6年生の教科書新聞教材活用のための必要事項を挙げた。事前の準備を周到に行っておくこと、特に子どもたちの実態、現状をしっかりと把握し用意することをもとに考察したものである。次の段階としては、複数社の教科書新聞教材を扱うことと、1年生、2年生、3年生での取り組みとの関連を考えることが必要である。さらには、小学校から中学校、高校への繋がりを検証していくことが課題となる。

#### 【注・引用文献】

- 1) 妹尾彰・枝元一三編著『子どもが輝くNIEの授業』（晩成書房）2008年7月発行 p.10
- 2) 同上 p.11
- 3) 同上 p.12
- 4) 同上 p.18-19
- 5) 『新しい国語四下』（東京書籍）平成23年度版 p.46-56
- 6) 『新しい国語五上』（東京書籍）平成23年度版 p.63-77
- 7) 『新しい国語六上』（東京書籍）平成23年度版 p.61-75